



# 康成集

新潮日本文学

15

新潮社



© Hideko Kawabata Printed in Japan 1968

口絵写真撮影 田沢 進

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 1800円

川端康成集 新潮日本文学 15

昭和四十三年十二月十二日 発行  
昭和五十三年十月三十日 十五刷

著者 川端康成

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六一五一一一

編集部(03)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株

式会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡織

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

雪 国

千 羽 鶴

山 の 音

み ず う み

眠 れ る 美 女

古 都

\*

7

81

157

320

392

448

水	住	し	反	禽	抒	伊	葬	招
		ぐ			情	豆	式	魂
月	吉	れ	橋	獸	歌	の	の	祭
						踊	名	一
						子	人	景

642	636	631	624	609	592	575	569	561
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

か	ざ	雨	心	有	弱	骨	掌	片	弓
け	く			難	き	拾	の	*	浦
す	ろ	傘	中	う	器	い	小	腕	市
							説		

683 680 679 678 676 675 672

656 650

年解  
譜説

不 秋 笹  
の  
死 雨 舟

福永武彦

706 694

691 688 686

川端康成集





## 雪 国

国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなつた。信号所に汽車が止つた。

向側の座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。娘は窓いっぱいになり出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん。」

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻えりまきで鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしゅうございます。」

「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなつたよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいておりますのですつてね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて参るだらうよ。若いのに可

哀想だな。」

「ほんの子供ですから、駅長さんからよく教えてやっていただいで、よろしくお願ひいたしますわ。」

「よろしい。元気で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だつたよ。よく雪崩なだれてね、汽車が立往生するんで、村も焚出たきだしがいそがしかつたよ。」

「駅長さんずいぶん厚着に見えますわ。弟の手紙には、まだチョッキも着ていないようなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでゐるよ。それでごろごろあすこにぶつ倒れてるのさ、風邪をひいてね。」

駅長は官舎の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでしょうか。」

「いや。」

「駅長さんもうお帰りですの？」

「私は怪我をして、医者に通つてるんだ。」

「まあ。いけませんわ。」

和服に外套がいのちの駅長は寒い立話をさっさと切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、

「それじゃまあ大事にいらっしやい。」

「駅長さん、弟は今出ておりませんか？」と、葉子は雪の上を目捜しして、

「駅長さん、弟をよく見てやって、お願いです。」

悲しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から木魂こたまして来そうだった。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかった。

そうして線路の下を歩いてゐる駅長に追いつくと、

「駅長さん、今度の休みの日に家へお帰りって、弟に言つてやって下さあい。」

「はあい。」と、駅長が声を張りあげた。

葉子は窓をしめて、赤らんだ頬に両手をあてた。

ラッセルを三台備えて雪を待つ、国境の山であった。トンネルの南北から、電力による雪崩ゆたね報知線が通じた。除雪人夫延人員五千名に加えて消防組青年団の延人員二千名出動の手配がもう整っていた。

そのような、やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。

しかし、ここで「娘」と言うのは、島村にそう見えただけであつて、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかった。二人のしぐさは夫婦じみていたけれども、男は明らかに病人だった。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。実際また自分より年上の男をいたわる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思われよう。

島村は彼女一人だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だろうときめているだけのことだった。でも

それには、彼がその娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果、彼自らの感傷が多分に加わつてのことかもしれない。

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えてゐる、はつきり思い出そうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れていて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのようだと、不思議に思いながら、鼻につけて匂いを嗅いでみたりしていたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだった。彼は驚いて声をあげそうになつた。しかしそれは彼が心を遠くへやっていたからのもので、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が写つたのだった。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明りがついている。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチームの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れているから、指で拭くまでその鏡はなかったのだった。

娘の片眼だけは反かえつて異様に美しかったものの、島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさという風な旅愁顔を俄ちかかぶくりして、掌でガラスをこすつた。

娘は胸をこころもち傾けて、前に横たわつた男を一心に見下ろしていた。肩に力が入つてゐるところから、少しい

かつい眼も瞬きさえしないほどの真剣さのしるしだと知れた。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげていた。三等車である。島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかつた。

娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので、じかにだつて見られるのだが、彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそっちを向いては悪いような気がしていたのだった。

鏡の中の男の顔色は、ただもう娘の胸のあたりを見ているゆえに安らかだという風に落ちついていた。弱い体力が弱いながらに甘い調和を漂わせていた。襟巻を枕に敷き、それを鼻の下にひっかけ口をびったり覆い、それからまた上になった頬を包んで、一種の頬かむりのような工合だが、ゆるんで来たり、鼻にかぶさつて来たりする。男が目をお動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやっていた。見ている島村がいら立って来るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返していた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ気がついて直してやっていた。これらがまことに自然であった。このようにして距離というものを忘れながら、二人は果てしなく遠くへ行くものの姿のように思われたほ

どだった。それゆえ島村は悲しみを見ているというつらさはなくて、夢のからくりを眺めているような思いだった。不思議な鏡のなかのことだったからでもあろう。

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合いながらこの世ならぬ象徴の世界を描いていた。殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸が顫えたほどだった。

遙かの山の空はまだ夕焼の名残の色がほのかだったから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までもの形が消えてはいなかつた。しかし色はもう失われてしまっていて、どこまで行っても平凡な野山の姿が尚更平凡に見え、なにもも際立って注意を惹きようがないゆえに、反つてなにかぼうっと大きい感情の流れであった。無論それは娘の顔をそのなかに浮べていたからである。姿が写る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。しかしほんとうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのよう錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。

汽車のなかもさほど明るくはなし、ほんとうの鏡のよう

に強くはなかつた。反射がなかつた。だから、島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまつて、夕景色の流れのなかに娘が浮んでいるように思われて来た。

そういう時彼女の顔のなかにともし火がともつたのだった。この鏡の映像は窓の外のもし火を消す強さはなかつた。ともし火も映像を消しはしなかつた。そうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだった。しかし彼女の顔を光り輝かせるようなことはしなかつた。冷たく遠い光であつた。小さい瞳のまわりをぼうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であつた。

こんな風に見られていることを、葉子は気づくはずがなかつた。彼女はただ病人に心を奪われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目にも止らなかつた。だろ。島村が葉子を長い間盗み見しながら彼女に悪いということとを忘れていたのは、夕景色の鏡の非現実な力にとらえられていたからだつたらう。

だから彼女が駅長に呼びかけて、ここでもなにか真剣過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先に立つたのかもしれない。

その信号所を通るころは、もう窓はただ闇であつた。向うに風景の流れが消えると鏡の魅力も失われてしまつた。

葉子の美しい顔はやはり写っていたけれども、その温かいしぐさにかかわらず、島村は彼女のうちになにか澄んだ冷たさを新しく見つけて、鏡の曇つて来るのを拭おうともしなかつた。

ところがそれから半時間ばかり後に、思いがけなく葉子達も島村と同じ駅に下りたので、彼はまたなにか起るか自分にかかわりがあるかのように振り返つたが、ブラット・フォウムの寒さに触れると、急に汽車のなかの非礼が恥ずかしくなつて、後も見ずに機関車の前を渡つた。

男が葉子の肩につかまつて線路へ下りようとした時に、こちらから駅員が手を上げて止めた。

やがて闇から現われて来た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のようにものしい雪装束だつた。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいていた。待合室の窓から線路の方を眺めて立っている女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶっていた。

島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そのほんとの寒さをまだ感じなかつたけれども、雪国の冬は初めてだから、土地の人のいでたち先ずおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」  
「へい、もうすっかり冬支度です。雪の後でお天気になる

前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷点を下つておりますでしうね。」

「これが氷点以下かね。」と、島村は軒端のきばの可愛い氷柱つららを眺めながら、宿の番頭と自動車に乗った。雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでいるようだった。

「なるほどなににさわつても冷たさがちがうよ。」

「去年は氷点下二十何度というのが一番でした。」

「雪は？」

「さあ、普通七八尺ですけれど、多い時は一丈を二三尺超えてますでしうね。」

「これからだね。」

「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降つたのが、だいぶ解けて来たところですよ。」

「解けることもあるのかね。」

「もういつ大雪になるか分りません。」

十二月の初めであった。

島村はしつこい風邪心地でつまっていた鼻が、頭のしんまですつといちどぎに通つて、よぐれものが洗い落されるように、水漬みずじがしきりと落ちて来た。

「お師匠さんとこの娘はまだいるかい。」

「へえ、おりますおります。駅におりましたが、御覧になりませんでしたか、濃い青のマントを着て。」

「あれがそうだったの？——後で呼べるだろう。」

「今夜ですか。」

「今夜だ。」

「今の終列車でお師匠さんの息子が帰るとか言つて、迎えに出ていましたよ。」

夕景色の鏡のなかで葉子にいたわられていた病人は、島村が会いに来た女の家の息子だったのだ。

そうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたように感じたけれども、このめぐりあわせを、彼はさほど不思議と思うことはなかった。不思議と思わぬ自分を不思議と思つたくらいのものであった。

指で覚えている女と眼にもし火をつけていた女との間に、なにがあるのかなにが起るのか、島村はなぜかそれが心のどこかで見えるような気持もする。まだ夕景色の鏡から醒め切らぬせいだろうか。あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徴であつたかと、彼はふとそんなことを呟つぶやいた。

スキイの季節前の温泉宿は最も客の少ない時で、島村が内湯から上つて来ると、もう全く寝静まっていた。古びた廊下は彼の踏む度にガラス戸を微かに鳴らした。その長いはずれの帳場の曲り角に、裾を冷え冷えと黒光りの板の上へ拡げて、女が高く立っていた。

とうとう芸者に出たのであろうかと、その裾を見てはつとしたけれども、こちらへ歩いて来てもない、体のどこかを崩して迎えるしなを作るでもない、じつと動かぬその

立ち姿から、彼は遠目にも真面目なものを受け取って、急いで行ったが、女の傍に立っても黙っていた。女も濃い白粉の顔で微笑もうとすると、反って泣き面になったので、なにも言わずに二人は部屋の方へ歩き出した。

あんなことがあったのに、手紙も出さず、会いにも来ず、踊りの型の本など送るといふ約束も果さず、女からすれば笑って忘れられたとしか思えないだろうから、先ず島村の方から詫びかいわけを言わねばならない順序だったが、顔を見ないで歩いているうちにも、彼女は彼を責めるどころか、体いっぱいになつかしさを感していることが知れるので、彼は尚更、どんなことを言ったにしても、その言葉は自分の方が不真面目だという響きしか持たぬだろうと思つて、なにか彼女に気押される甘い喜びにつつまれていたが、階段の下まで来ると、

「こいつが一番よく君を覚えていたよ。」と、人差指だけ伸ばした左手の握り拳を、いきなり女の目の前に突きつけた。

「そう？」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないうで手をひくように階段を上って行った。

火燵の前で手を離すと、彼女はさっと首まで赤くなつて、それをごまかすためにあわててまた彼の手を拾いながら、

「これが覚えていてくれたの？」

「右じゃない、こっちだよ。」と、女の掌の間から右手を

抜いて火燵に入れると、改めて左の握り拳を出した。彼女はすました顔で、

「ええ、分つてるわ。」

ふふと含み笑いしながら、島村の掌を拵けて、その上に顔を押してた。

「これが覚えていてくれたの？」

「ほう冷たい。こんな冷たい髪の毛初めてだ。」

「東京はまだ雪が降らないの？」

「君はあの時、ああ言つてたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。そうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ来るものか。」

あの時は——雪崩の危険期が過ぎて、新緑の登山季節に入った頃だった。

あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる。

無為徒食の島村は自然と自身に対する真面目さも失いがちなので、それを呼び戻すには山がいいと、よく一人で山歩きをするが、その夜も国境の山々から七日振りで温泉場へ下りて来ると、芸者を呼んでくれと言つた。ところが、その日は道路普請の落成祝いで、村の繭倉兼芝居小屋を宴会場に使つたほどの賑やかさだから、十二三人の芸者では手が足りなくて、とうてい貰えないだろうが、師匠の家の娘なら宴会を手伝いに行つたにしろ、踊りを二つ三つ見せた

だけで帰るから、もしかしたら来てくれるかも知れないとのことだった。島村が聞き返すと、三味線と踊りの師匠の家にいる娘は芸者というわけではないが、大きい宴会などには時たま頼まれて行くこともある、半玉がなく、立って踊りたがらない年増が多いから、娘は重宝がられている、宿屋の客の座敷へなど滅多に一人で出ないけれども、全くの素人とも言えない、ざっとこんな風な女中の説明だった。怪しい話だとたかをくくっていたが、一時間ほどして女が女中に連れられて来ると、島村はおやと居住いを直した。直ぐ立ち上って行こうとする女中の袖を女がとらえて、またそこに坐らせた。

女の印象は不思議なくらい清潔であった。足指の裏の窪みまできれいであろうと思われた。山々の初夏を見て来た自分の眼のせいかと、島村は疑ったほどだった。

着つけにどこか芸者風なところがあつたが、無論裾はひきずっていないし、やわらかい単衣をむしろきちんと着ている方であった。帯だけは不似合に高価なものらしく、それが反ってなにかいたましく見えた。

山の話などはじめたのをしおに、女中が立って行つたけれども、女はこの村から眺められる山々の名もろくに知らず、島村は酒を飲む気にもなれないでいると、女はやはり生れはこの雪国、東京で、お酌をしているうちに受け出され、ゆくすえ日本踊りの師匠として身を立てさせてもらつつもりでいたところ、一年半ばかりで旦那が死んだと、思

いの外素直に話した。しかしその人に死別してから今日までのことが、恐らく彼女のほんとうの身の上話かもしれないが、それは急に打ち明けそうもなかった。十九だと言つた。嘘でないなら、この十九が二十一二に見えることに島村ははじめてくつろぎを見つけ出して、歌舞伎の話などしかけると、女は彼よりも俳優の昔風や消息に精通している。そういう話相手に飢えていてか、夢中でしゃべっているうち、根が花柳界出の女らしいうちとけようを示して来た。男の気心を一通り知っているようでもあつた。それにしても彼は頭から相手を素人ときめているし、一週間ばかり人間とろくに口をきいたこともない後だから、人なつかさきが温かく溢れて、女に先ず友情のようなものを感じた。山の感傷が女の上にも尾をひいて来た。

女は翌日の午後、お湯道具を廊下の外に置いて、彼の部屋へ遊びに寄つた。

彼女が坐るか坐らないうちに、彼は突然芸者を世話してくれと言つた。

「世話するって？」

「分つてるじゃないか。」

「いやあねえ。私そんなこと頼まれるとは夢にも思つて来ませんでしたわ。」と、女はぶいと窓へ立って行って困境の山々を眺めたが、そのうちに頬を染めて、

「ここにはそんな人ありませんわよ。」

「嘘をつけ。」



「ほんとうよ。」と、くるっと向き直って、窓に腰をおろすと、

「強制することは絶対にありませんわ。みんな芸者さんの自由なんですわ。宿屋でもそういうお世話は一切しないの。ほんとうなのよ、これ。あなたが誰か呼んで直接話してごらんになるといいわ。」

「君から頼んでみてくれよ。」

「私がどうしてそんなことしなければならぬの？」

「友だちだと思ってるんだ。友だちにしたいから、君は口説かないんだよ。」

「それがお友達ってもののなの？」と、女はつい誘われて子供っぽく言ったが、後はまた吐き出すように、

「えらいと思うわ。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」

「なんでもないことじゃないか。山で丈夫になって来たんだよ。頭がさっぱりしないんだ。君とだつて、からっとした気持ちで話が出来やしない。」

女は臉を落して黙った。島村はこうなればもう男の厚かましさをさらけ出しているだけなのに、それを物分りよくうなずく習わしが女の身にしみているのだらう。その伏目は濃い睫毛のせいか、ほろっと温かく艶めくと島村が眺めているうちに、女の顔はほんの少し左右に揺れて、また薄赤らんだ。

「お好きなのをお呼びなさい。」

「それを君に聞いてるんじゃないか。初めての土地だから、誰がきれいだかららんさ。」

「きれいって言ったって。」

「若い方がいいね。若い方がなにかにつけてまちがいが少ないだらう。うるさくしゃべらんのがいい。ぼんやりして、よごれてないのが。しゃべりたい時は君としゃべるよ。」

「私はもう来ませんわ。」

「馬鹿言え。」

「あら。来ないわよ。なにしに来るの？」

「君とさっぱりつきあいたいから、君を口説かないんじゃないか。」

「あぎれるわ。」

「そういうことがもしあったら、明日はもう君の顔を見るのもいやになるかもしれん。話に気乗りするなんてことがなくなるよ。山から里へ出て来て、せっかく人なつっこいんだからね、君は口説かないんだ。だつて、僕は旅行者じゃないか。」

「ええ。ほんとうね。」

「そうだよ。君にしたって、君が厭だと思ふ女となら、後で会うのも胸が悪いだらうが、自分が選んでやった女ならまだましだらう。」

「知らないっ。」と、強く投げつけてそっぽを向いたものの、